

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 175号

平成28年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (7)

7月3日

というのは、外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上の肉における割礼が割礼でもない。かえって、隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、また、文字によらず霊による心の割礼こそ割礼であって、そのほまれは人からでなく、神から来るのである。(ローマ書2・28-29)

われらは人生のたいていの問題は武士道をもって解決する。正直なる事、高潔なる事、寛大なる事、約束を守る事、借金せざる事、逃げる敵を追わざる事、人の窮境におちいるを見て喜ばざる事、これらの事についてキリスト教を煩わすの必要はない。われらは祖先伝来の武士道により、これらの問題を解決して誤らないのである。されども、神の義につき、未来の審判につき、そしてこれに対する道につき、武士道は教うる場所がない。そしてこれらの重要な問題に逢着して、われらはキリスト教の教示を仰がざるを得ないのである。キリスト信者たることは、日本武士以下の者たることでは

ない。武士道を捨て、またこれを軽んずる者が、キリストの善き弟子でありようはずが無い。神が日本人より特別に求めたもう者は、武士の靈魂（たましい）にキリストを宿らせまつりし者である。

7月4日

時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者を私はのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。アブラムは主が言われたようにいで立った。ロトも彼と共にいった。アブラムはハランを出たとき75歳であった。(創世記12・1-4)

人が自ら神を求むる時に、彼は芸術的にまたは倫理的に彼に近づかんとする。されども神が人を求めたもうた時に、人は信仰をもって神に至るより他に道がない。信仰は、神が備えたまいし救いの道に自己を信(まか)すことである。信仰に手段方法は何もない。「ただ信ず」である。信仰は美しき儀式でもなければ、うるわしき思想でもない。自己の罪の目覚め、神の恩恵に引かれて、「起ちて、わが父に行かん」(ルカ伝15・18)と書いて、彼のふところへ帰り行く事である。「神の恩恵に応ずる人の信仰」、それが真のキリスト教である。

7月11日

そのときペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟が私に対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。7たびまでですか」。イエスは彼に言われた、「わたしは7たびまでとは言わない。7たびを70倍するまでにしなさい。……あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。(マタイ伝18・21-22, 35)

罪は人の神に対する負債である。しかしてこの負債を免除されて、彼は他(ひと)のおのれに対する負債を免除せざるを得ないのである(マタイ伝6・12参照)ゆるすとゆるさるるとは同時に行われるのである。ゆるされてゆるすのである。ゆるす心がありてゆるさるるのである。しかしてゆるしまたゆるされて、われらは自身神の聖兵となり、また堅き愛の団体となることを得て、悪魔を戦場より駆逐することができるのである。信者の活動をさまたぐるものにして、相互に許さざる罪のごときはないのである。宥恕の徳の欠乏よりして、信者は敵と相対してしばしば見苦しき敗北を取るのである。神にわが罪をゆるされただけでは足りない。われも他の罪をゆるすを得て、われはイスラエルの勇者となりて、一人にて千人を追い、二人にて万人を破ることができるのである。(申命記32・30)寛仁大度は勇者の特性である。聖軍の聖兵はこの特性を欠いてはならない。

7月12日

あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きに満ちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの救いを得ているからである。(ペテロ第1書1・8-9)

信仰は第1に誠実なり。第2に信頼なり。第3に実行なり。三者その一を欠いて、信仰は信仰にあらざるなり。人は信仰によりて救われるというは、かかる信仰によりて救われるというなり。このほか別に信仰有ることなし。また救いあることなし。信仰の道たる、蒼天に輝く太陽のごとくに明らかなり。

7月17日

わたしは、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰の量りにしたがって、慎み深く思うべきである。なぜなら、一つのからだにたくさんの方肢があるが、それらの方肢がみな同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互いに方肢だからである。このように、私たちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが…奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをするものであれば勧め、寄付する者は惜しみなく寄付し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。(ロマ書 12・3-8)

謙遜とは、おのれに適せる働きを認めて、熱心をもってこれに従うと共に、自分に適せざる役目を適するごとく誤認することなく、他人の適任なるは充分にこれを認めて敬意を表し、おのおのの働きが一つ体の方肢として肝要なるものなるゆえ、互いに高ぶることなく、同時に、自己に与えられし技能を隠さずして用うること—これすなわち謙遜である。心を高ぶるなかれである。同時に、自己に与えられし才能について公平に思うべしである。そして一つ体の一つの方肢としてその才能を用いよである。半ば消極的にして半ば積極的、これキリスト教的謙遜の特徴である。普通道徳家の言う謙遜に比してその差のいかに大なるよ！ これクリスチャンのおこのうべき謙遜である。

7月22日

しかし、あなたは、自分が学んで、確信しているところに、いつもとどまっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救いに至る知恵を、あなたに与え得る書物であることを知っている。聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである。(テモテ第2書3・14-17)

聖書の研究は困難なる事業である。その研究の結果、限りなき生命の泉をくみうるも、ここに達するまでには大いなる努力を要する。それはあたかも金銀の採掘のごときである。金をもって身をよそおい、銀をもって物をかざるはうるわしといえども、これを採掘するは容易ならざる事業である。聖書もまたしかり。……しかしながら、困難なりといえどもこれ最も貴き事業である。聖書研究の困難を解せず、またその意義を解せざるものは、ややもすればこれをもって伝道事業と別視するものがある。しかしながら聖書研究にまさるの伝道はないのである。聖書をおいて他に国民を救う途はずこにあるか。つとむべきは聖書研究である。進むべきは神のことばの探求である。

7月26日

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ伝3・16)

目的は人生最大の幸福なる永生の授与。これに達するの道は、人にありては最も容易なる信頼の道、神にありては最も最も困難なるひとり子の下賜。人を無限に恵まんがために、神にありては無限の犠牲、人にありては最も簡易なる方法、これ何びともその恵みに洩れざらんがためなり。すべて信ずるものの救われんためなりという。愛の極、恵みの極、神はかくのごときものなり。神の愛とはかくのごとき愛なり。しかしてキリストの福音とはかくのごとき愛を伝えるものなり。



7月27日

神よ、しかが、谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ。わが魂はかわいているように神を慕い、いける神を慕う。いつ、わたしは行って神のみ顔を見ることができようか。(詩篇 42・1-2)

余は平安を得るの道を知れり。されども道を知るは必ずしも道に入るにあらず。キリストにおける信仰は余を罪より救うものなり。されども信仰もまた神のたまものなり (エペソ書 2・8)。余は信じて救われるのみならず、また信ぜしめられて救われるものなり。ここにおいてか余は全く自身を救うの力なき者なるを悟れり。さらば余は何をなさんか。余は余の信仰をも神より求むるのみ。キリスト信徒は絶え間なく祈るべきなり。しかり、彼の生命は祈祷なり。彼なお不完全なれば祈るべきなり。彼なお信足らざれば祈るべきなり。彼よく祈りあたわざれば祈るべきなり。恵まるるも祈るべし。のろわるるも祈るべし。天の高きに上げらるるも、陰府 (よみ) の低きに下げらるるも、われは祈らん。力なきわれ、わが能うことは祈ることのみ。

7月28日

だから、わたしたち落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされて行く。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の思い栄光を、あふれるばかりに私たちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。(コリント第2書4・16-18)

しかり、余のすべての善きものは墓のかなたにおいて在る。余の自由も、余の満足も、余の冠も、すべて来たらんとするキリストの王国において在る。余は今は待望の地位に立つものである。……

ゆえに、この世における余の生涯はどうでもよい。憎まるるもよい。誤解せらるるもよい。貧しきもよい。裸なるもよい。……余の運命を定める者は、余のために自己(おのれ)を捨てたまいし、余の救い主イエス・キリストである。彼は余のために所を備えんために父のもとに行きたもうた。彼は「また来たりて、なんじらをわれに受くべし」(ヨハネ伝14・3)と約束したもうた。余はこの世にありては旅人である。暫時の滞留者である。余は一時、天幕をこの地に張る者である。永久の住み家を築く者ではない。神が余を呼びたもう時には、直ちに天幕の綱を断ち、これを畳んで、彼の国へ急ぐ者である。

7月30日

見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中に入って彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。(ヨハネ黙示録3・20)

キリストは聖霊である。聖霊はキリストである。ゆえに聖霊を受くるはキリストを迎うるのである。われら聖霊を受けんと欲して雲をつかまんと欲するのではない。われらはある確実なる目的を達せんとするのである。われらはキリストをわが心に請(しょう)ぜんとするのである。これに適當の準備がいる。適當の方法がある。準備はへりくだることである。方法は、絶えず祈ることである。しかしこの準備をなし、この方法を尽くして、彼の到来(じゅらい)は確かである。

7月31日

朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは二つともに良いのであるか、あなたは知らないからである。(伝道の書 11・6)

この宇宙は神の造りたもうた宇宙である。ゆえに、この宇宙にあって善をなして、その報酬(むくい)の、われらにめぐり来たらぬ理由(わけ)はない。ただ宇宙の宏大なるがゆえに、原因が結果となりてわれらに還り来たるまでに、多くの日時(てま)を取るまでのことである。「なんじのパンを水の上に投げよ。多くの日の後に、なんじ再びこれを得ん」(伝道の書 11・1)われらはただ善をまいておけばよい。善は人の無情によって消えるものではない。まいたる善を百倍にして、その人に還すのが、この宇宙の特性(もちまえ)である。ゆえに聖書は教えて言う、「兄弟よ、善を行い、倦むことなかれ」(テサロニケ後書 3・13)